

アマダイ通信NO. 53


(Tile fish network letter)

06年水温む頃

知人・友人各位

思ったほどはスキーに行けない間に雪解けの季節が始まったようですが、花粉症に悩まされていないでしょうか？今回は故郷の話題が多くなりました。故郷では町村合併に伴う選挙が4月に予定され、早や中盤とも言われているようです。少子高齢化の日本で、故郷の置かれた位置を考えれば、国際的な視点で柔軟に発想でき、先頭に立って地域を世界に売り込める“営業マン”に、地域の政治を担って欲しいものです。故郷に幸運あれ！

◎故郷を時代のトップランナーの環境産業都市に！

前々号で、同和鉱業の能代港利用で能代山本を環境産業都市化し、地域振興を図るチャンスであること、東大三鷹寮の先輩である同和鉱業吉川社長と豊沢能代市長・加藤八森町長との会談をが取り持ったことを報告しました。その後、昨年中に取り敢えず2回同和鉱業の鉱石を積んだ船が中国広州から入り、これから定期的に入る予定です。同和は小坂町で年間約7万トンの電気銅を生産し、複雑鉱と呼ばれる難処理鉱石から金、銀などの貴金属やビスマス、テルルなどのレアメタルなど17種類の元素を回収できる世界でも数少ない精錬所です。輸入したパイライト（硫化鉄精鉱）は、銅の製錬過程に必要な鉄材で、酸化反応で発熱し炉内の温度を高温に保つために使用されます。中国広東省雲浮の原産で、丸紅を通じ中国・黄埔港から陸揚げされました。1回目は10月26日で5千5百トン、2回目は12月9日で6千百トン。同社は、原料の鉱石をオーストラリアやカナダから輸入、青森港に自前の貯鉱舎を有し、能代港について「中国からまとまった量を輸入することになり、かねて働き掛けがあった市の要請に応えたこと、以前に関連企業が利用した実績があり、港湾機能も備わっているのが理由」とし、「距離的にも近く、今後高速道路が開通すれば利便性が増す」と、能代港利用に積極的です。

今回の鉱石輸入自体、能代の運輸業等の発展と雇用に貢献します。汚染土壌（管理土壌）や携帯電話、パソコンなどの廃家電、自動車のシュレッターダストなどの産廃（これらは金・銀・銅などが高純度で含まれ、都市鉱石とも言える資源）搬入の環境作りになり、能代エコタウンの第一歩になります。更に帰り荷で中国の富裕層相手に秋田こまちや八竜メロン、りんご、秋田杉などの能代山本の名産を安く運び売り込むことで、地域が更に活性化します。ところが、年明けに同和鉱業の吉川社長にお会いしたところ、能代市の姿勢が及び腰でスピードに欠けることを危惧、他の港からの働きかけもあるニュアンスでした。そこで「能代山本フォーラム21」の事務局長を御願している飯坂誠悦市議を通じて市長に伝え、あらためて会談を設定することになり、1月20日（金）に市長の上京に合わせ、昨秋に続き二回目のトップ会談が実現しました。会談では、同和鉱業が百億円かけて小坂に来年稼働させる新炉で処理（精錬）する「都市鉱石」を能代港からあげたい。設備投資も必要なので市のスピーディな対応と、市が前面に立った住民対策などでの協力姿勢が強く求められました。船川港からの撤退はないでしょうねと男鹿市から陳情されていることも明らかにされ、豊沢市長も積極姿勢を表明、前進がみられました。市の今後の頑張りに大いに期待したいと思います。




同和鉱業の資源再生・環境事業に問題のないことは、青森、男鹿、小坂で実証済みです。能代が決断できない間に他港への設備投資が嵩んだ場合、能代港は当分利用されないこととなります。周回遅れのマラソンランナーから最先端の環境産業都市として発展する岐路にあります。同和鉱業が活用することで、中国、韓国、台湾、東南アジアから、4、5万トクラスの船まで頻繁に入るようになり、巨大釣堀と揶揄される能代港も、国際港として発展します。関連産業も進出、建設業、運輸業、港湾や工場、倉庫のオペレーターなどの雇用も大きく生み出され、様々な方面に効果が波及します。能代産廃の悪夢を振り払い能代山本が大きく発展する、世界に雄飛できるかどうかの転換点です。東京やアメリカにだけ目を向ければ秋田は「裏日本」ですが、ロシア、朝鮮、中国、アジア・アフリカ、延いてはヨーロッパを考えれば、「表・裏」の差はなくなるどころか、中・朝・露に関しては秋田に地の利があります。

幸い四月には町村合併による新市、能代市の市長・市議選があります。立候補者は同和鉱業の能代港誘致、港の利活用、環境産業都市能代の実現を大きく公約に掲げて、市民の理解・支持を得、エコタウン実現に邁進するチャンスです。同和鉱業の能代港利用で荷役、運送だけでなく倉庫、前処理工場建設等で能代に金が落ち、大量の雇用が創出されます。環境関連企業の呼び水となり、環境産業都市としての飛躍が図れます。来年操業開始の小坂の新炉は内陸で規模を大きくできず、塩分を含む排水を川に流せないの、多大の脱塩コストがかかります。同和鉱業のアジアでの資源再生・環境事業が軌道に乗れば、早晚新々炉が必要です。その時は八森の発盛鉱山の跡地など能代山本の沿海に脱塩処理不要の、輸送コストの安い、競争力抜群の大型炉新設まで展望できます。公害から立ち上がり環境産業を集積する水俣、製鉄技術を核に国際エコタウンとして発展する北九州に匹敵する環境産業都市としての可能性が開けます。その時、能代のシャッター商店街も久々に賑わいを取り戻します。「能代PR大使」の~~も~~も「能代山本の営業」に燃えています。「その貧しさに涙した」青春の原点、「故郷のために」多少とも役立てるのは嬉しいことです。

◎おが屑建材が秋田の、日本の森を救う！

ミサワホームのグループ会社と高橋カーテンウォールと一緒に仕事をし、大学の後輩でもある原島和雄君が、事務所にぬーっと顔を出す。東大農学部林産学科で同期だった安藤教授の、粉体を加圧成型する技術を世に出したいので手伝って欲しいという。長い付き合いだし、技術も面白い、スポンサーもついているので顧問料も出せるという。~~も~~にも異議はない。彼も才能の割には世渡りが下手で、その点は似た者同士だが、~~も~~のお株を奪うような、コーディネートが冴えだ。

おが屑と樹脂の微粉をプレスし建材を作るプロジェクトは、積水化学と組みシステムフロアとして実現しているので、再生プラスチックで作る運搬用パレットの販売を先ず手伝うことになる。ところが既存のバージンプラスチックのパレットの半値以下と安く売れ行き好調なのに、原料のペットボトルが中国などで引っ張りだこで思うように集まらず、月産1万台では直ぐ玉切れとなり、売り込み先には失礼なことになる。それに雑多な色の再生プラスチックが原料では黒のパレットしかできず、食品向けにはイメージが悪いなどの指摘も受ける。売り込み先の期待に答えるためにも、おが屑と樹脂の微粉でパレットも作ることにする。工場をどこに作るか？ユーザーに近く木粉の手に入れ易い所と言うと、西川材を産する原島君の故郷の秩父もあるが、人件費や土地代の安さ、おが屑の量からすると先ずは秋田だ。

原料の8割を占めるおが屑集めが鍵だ。木材は製品になる過程で樹皮や大鋸屑として5割方が捨てられる。厄介者の大鋸屑が大量に余っている筈。二人で秋田杉の本場、の故郷に向かう。市職員の案内で木材関連企業や空き工場を回る。意外にも家畜の寝床や茸菌床として県外出荷されたり、バイオマス発電原料として有償でかなり使われている。使い切れない分をペレットに固め燃料にするプランもある。だが県外へ単なる大鋸屑として出荷したり燃やしてしまうより、地元でペレットに加工、付加価値を高め出荷した方が、雇用と所得の面で地元へ貢献する。ペレットに固め、補助金をつけ無理やり燃料に使ってもらうより、固める工程が不要で低コスト、環境に優しく高付加価値。ずっと合理的で経済的だ。

切り刻まれ、半分捨てられることで製品化される木材の、その半分の不要部分が集められ、2割のプラスチックの助けを借りて固められ、木として再生、価値化される。ラインを増やし、ペレット以外に用途を開発することで、大鋸屑から更に、伐採したまま山に捨てられ山が荒れる原因になっている間伐材の利用に道を開き、林業の活性化に貢献できる。間伐材の利用が進むと山も手入れされるようになり、災害に強く、高付加価値の木材が生産される豊かな森が秋田に、日本中に蘇ります！

◎アジアの経済発展で日本農業も競争力向上！

お蔭様で、2月6日の生源寺東大大学院教授（農業経済、S45年東大三鷹寮入寮）をお迎えした、能代山本フォーラム21の第11回町興し講演会は、80名以上の方に熱心に聴講していただき、懇親会も盛り上がりました。二次会は刺身、シャブシャブ、酔の物、焼き物と故郷の鮫のフルコースに感動しました。農業も目を外に向けるとアジアの経済成長で①<安全・安心・健康> 指向のアジア富裕層向け日本食品の輸出に可能性大、②賃金・購買力向上、土地値上りで アジア農業の競争力低下、③人口大国の購買力向上・食生活の高度化による需要増と④農産品の国際価格上昇で日本農産物の価格競争力が向上し、日本農業に長期的可能性ありとのこと。そのためには取り合えず①大規模化と技術力の更なる向上で競争力を強化し、②秋田も稲作一辺倒から多角化、高付加価値化を図れるかが、鍵になりそうです。以下、2月8日の地元紙、北羽新報の記事を転載します。


先進国の中でも日本は食糧自給率（供給熱量ベース）が最低レベルにあり、農業基盤が弱い弱だと思われがちだが、生源寺教授は、生産額ベースの自給率と80年代半ばまでは肉類、乳製品等を多く取るようになった食生活の変化が主な原因だったが、食生活が飽和状態になった90年代以降は様相が一変し「自給率の低下はそのまま国内農業の危機につながっている」と指摘。耕作放棄地の増加や農業の高齢化がそれを反映しているとした。


ただ、60年代から一貫して低下してきた自給率だが、生産額ベースの自給率では70%。「野菜はカロリーベースの自給率には反映されにくい、多くの農業者にとっての関心事は経済的な価値。金額的にはまだ70%を自給している」という意味では、日本農業はまだまだ頑張っているとも言える」との見方を示した。

実際、農業生産指数は60～64年を100とした場合、大きく低下した豆類、イモ類と、米を除いて、畜産物は297、野菜129などで、総合は122と上がっている。生源寺教授はこれらのデータから日本農業の力強さに着目し、さらに「中国などのアジアが成長を続けていけば相対的に日本農業の国際競争力は上がる。加えて世界一厳しい消費者に鍛えられてきた国内農業の生産物は安全性が高く、アジアの裕福層にとっては魅力的なものになりうる」と、可能性も示唆した。



その上で、地域ぐるみで農業用水路、農道の維持に努めてきた農村の生活形態は守るべきものだとし、「コミュニティーを守りつつ売れる農作物をどう作るか。いずれ同じ問題に直面するであろうアジアの全体のモデルになれる。難しいが挑戦のしがいのあるものではないだろうか」と述べ、将来展望の明るい要素に目を向けるよう導いていた。

◎完売御礼！御免なさい！市職員は営業マインドとコスト意識を！

2月初旬に東京日本橋で能代市や農協の職員が上京、故郷能代山本の物産展が二日にわたり開かれました。八森の地酒白瀑（しらたき）や、キリタンポ・ハタハタ鮭などの試飲・試食と販売が行われるとのことで、もメールで沢山の方に案内させていただきました。

ところが初日、夕方顔を出したところそれらしい形跡が何もないとのクレームが入り、も翌日2時頃、友人と示し合わせて顔を出したのですが、売り切れで店を畳むところでした。他にもせっかく足を運んだのに・・・という方が沢山おられたようです。済みませんでした。併せて市の方には営業マインドとコスト意識を強く持つように御願い致します。





◎癌と保険の経済学

不慮の事故や病気、災害にもびくともしない程の資産を持つ人間には不要で、掛け金を払えない低所得者には無縁な生命保険は、リスクを広く分散し、中産階級の生活を保障するシステムとして、中産階級の増大と共に発展する。も大腸がんに罹って初めて、生命保険の恩恵に預かり、ソニー生命から1千万円の生前給付金と、他2社分も含め3百万円ほどの入院給付金、手術給付金が入り、大いに助かる。万一、余命半年とか、1年とか宣告されたとしても、保険金だけでどうにか闘病生活を支えることができただろう。自分の掛け金以外に、健康な方々の掛け金に支えられると同時に、が健康な方々も代表して、癌の犠牲になったとも言える訳だ。

会社設立時に、経費として税金から控除されるし、解約すれば退職金代わりにまとまった金が入るからと、かつての慶大全共闘ML派の仲間の村中君に勧められソニー生命に入った。子供が小さい間は死亡後の家族の生活保障として死亡保険金も大事だが、子育てに金のかからない世代になると、病気・入院給付、所得保障が大事になる。配偶者がフルタイムで働いたり、住宅ローンに生命保険が付帯していれば尚更だ。それに死亡時保障保険には既に幾つか入っている。起業するとサラリーマンと違い、病気で働けなくなった時の保障がない。そこで働けなくなる可能性の高い癌、心筋梗塞、脳梗塞、糖尿病の4大成人病に罹った時に、死亡保険金相当が生前に給付される保険に入れてもらった。

大腸がんで盲腸を含め上行結腸を30センチカットし、9箇所切除したリンパ節の内3箇所¹に癌細胞が転移、ステージⅢbという厳しい病状だが、幸い命に別状はない。転移した癌細胞も手術で取り切れたということで、三楽病院の主治医の阿川先生はじめスタッフの皆さんには大いに感謝しなければならない。腫瘍マーカーなどの検査結果も異常なく術後3年経過しようとしている。この1週間で胸と腹部のCTを撮り、異常がなければ4月の診察を経て、朝晩服用の抗癌剤も飲まなくて済むようになる。癌になると新しく生命保険に入れず、団体信用生命保険加入が義務付けられる住宅ローンも原則組めないことになるが、無事3年経過して、生命保険に入れる、住宅ローンも組めるようになるのだろうか？

◎カルタゴの丘に立ち、砂漠のバラに感動する

バラの花ビラのように複雑な縷のついた、様々な形、大きさの、半透明なベージュ色の綺麗な石が、チェニジアの市場や、土産物屋で売られている。その名も砂漠のバラ。砂の下深く、7メートルほど掘ると鍾乳洞のようなものが出現する。そこに気の遠くなるような長年月をかけ硫酸カルシュームが結晶したという。貧しい砂漠の原住民ベルベル人が掘り出して売る。成長の途次深い闇の世界から掘り出され、砂漠の厳しい陽射しを浴びても長い眠りから覚めぬまま、砂漠のローズは二束三文で買われて行く。3個1ディナール(約90円)！これ3個。小振りの石を選び出すと、3個1ディナールはこの一番小さいやつだよ！じゃこれは？2でいいよ！OK！商談成立。すると隣で石を並べる親父が擦り寄る。この大きいのはどうだ？3個買ったからいいよ！が返す。安いよ！大きい方が見栄えがいいな！さっきは小さい方が持ち帰るのに都合いいと思ったのだが、事務所の熱帯魚の水槽で砂漠のローズが咲く様子を想像してしまう。幾らだい？How much?英語がの口から飛び出す。若い時、十年以上勉強して、シェークスピアまで翻訳させられたのだ。これくらいの英語はまだ自然に出てくる。これくらいしか話せないのが、日本の英語教育の問題だ、情けない！そんなことまで考えるに、1ディナールでどうだ！と迫る親父。OK！あー荷物が増えてしまった！内なるが嘆く。

高校の時、世界史を取っておくんだって、後悔しても始まらない。学生時代だって、マルクスと対するのにも、同じ反省をした。カント、ヘーゲル、フョイエルバッハ、更にはアリストテレス、プラトンと遡る西洋哲学の素養の無さを嘆いた。年末・年始の休みにチェニジア・モロッコのマグレブ2国を旅する直前、慌てて関連書籍を数冊手に入れ携行する。チェニジアと言えばカルタゴ、カルタゴと言えばハンニバル。紀元前2世紀、第二次ポエニ戦役で、ローマ相手に互角に戦った。地中海をスペインに渡り、アルプスを象と共に越え、イタリア南端にまで達し、ローマを背後から脅かした。ようやくハンニバルを打ち負かしてローマは地中海世界の覇権を握り、帝国の形成に踏み出すことができた。歴史に“もし”は禁句だが、ハンニバルが時を稼いで戦力強化を図るのではなく、万が一の可能性に賭け、勢いに乗じ堅忍不拔のローマを一挙に突き打ち破っていたら、世界の歴史は大きく変わったかもしれない。チュニス郊外カルタゴには盛時を偲ばせるものはほとんどない。あるのは征服者ローマの時代の遺跡だ。血しぶき飛び、阿鼻叫喚がこだま、炎に包まれ、焦土と化したカルタゴの丘の先には、その昔と変わらず、地中海の紺碧の海が広がる。

カルタゴの辺境に過ぎなかったモロッコも然り。間のアルジェリアを措いて、両国がツアー目的地に選ばれたことから、比較的政情は安定している。だが街中を馬車が走り、子供が手を出しては金をねだる。物乞いまがいの物売りが多いことを考えても、経済の停滞は覆うべくも無い。支配者がローマからオスマントルコに変わっても、強大な帝国の属領として繁栄した両国だが、その面影はない。そのまま周りの進歩に取り残されたと表現すべきか？栄枯盛衰は世の定めとはいえ、回教圏のおしなべての貧しさは何故か？一見時間がゆったり流れ、他人のために使う時間よりも自分と家族のために使う時間が圧倒的に多い。この半世紀、豊かな生活を獲得した日本人が失ってしまったものを、まだ持っているような生活だ。だが人口の少なからぬ部分が欧米に出稼ぎしたり、移民したりするのは、彼ら自身、今の生活に満足していないということだ。古代から中世の交易経済、農業に基礎をおいた重商主義経済の時代に、地の利を得て繁栄を謳歌したが、近世に入り産業革命を経ぬまま資本主義経済から取り残され、その相克が今、世界を大きな不安で蔽っている。

◎産炭地大同の景気・・・黄土高原だより (NO. 345) (06. 01. 23 高見 邦雄)



大同は中国最大の石炭の街。他の産業もあるにはあるが、それらも石炭関連の産業にぶら下がっていると考えていい。以前大同市青年連合会の主席で、その後大同市南郊区の共産党委員会副書記に昇進した祁学峰が、私に話したことがあります。「南郊区は、大同の中では環境に恵まれているし、近郊農村だから農業収入も多いと思っていたけど、驚いたのは収入の大部分は石炭によるものだった。農業は農民がなんとか自分で生きてくれば、それでいいといった程度」。ですから大同の景気は石炭に大きく左右されます。一時期、石炭価格が落ち込みました。隣の陝西省や内蒙古で天然ガスの開発が進み、北京などでも石炭から石油、天然ガスへのエネルギー転換が進むと思われた訳です。生産調整で石炭価格を維持し、あわせて国営の大手炭鉱を守るために、中小・零細の炭鉱が整理されました。大同の炭鉱には四川省、雲南省などの南方を含め遠方からの出稼ぎ労働者が、沢山いました。その人たちの仕事がなくなります。しかし、お金がなくて帰るに帰れない。失業者が沢山いて、治安も悪くなり、とげとげしい雰囲気になったんですね。

ところが、最近の中国の経済発展はエネルギー転換さえ、追い越してしまいました。石炭だって生産が追いつかないのです。石炭産出で名高い山西省で、輸入炭を使うことすらあったようです。価格もどんどん上がっています。大同の炭鉱の坑口での価格は次のように変化したそうです。いずれも1トンの価格です。94～98年30～40元、98～2000年40～50元、2001年80元、2002年120元、2003年150元、2004年180元、2005年240元、すごいでしょ。この数年で何倍にも高騰しました。それに伴って各方面の賃金も上がっています。おおまかな傾向を示すと、次のようになるようです。まずは、政府機関や、事業単位の公務員の月収。1990年108元、1995年310元、2000年780元、2005年1480元、大同の花形企業、第2火力発電所の労働者の場合、ここは発電した電力の、全量を、北京に送っています。1990年2800元、1995年3000元、2000年3200元、2005年3500元。市内の一般企業は1990年100元、1995年200元、2000年400元、2005年500元、所得倍増、なんてものじゃない。勿論、消費者物価も上昇してきますけど。中国全体でも、経済の大膨張があったんですけど、大同の場合石炭だけの単一経済とっていいくらいですから、ほかの都市以上に、変化が激しかったかもしれません。

とにかく私が最初に大同に行った1992年頃は、大同の目抜き通りを馬車が歩いてました。自動車はほとんどなく、タクシーも外国人の泊まれる2つのホテル、雲崗賓館と大同賓館の前に数台ずつ停まっているだけ。流しなんてまずありません。皆ノーメーターで、どこにいくのも20元だといわれました。賃金との比較でみてもベラボウな料金ふっかけてたんです。「高すぎる」というと、「じゃあ、乗るな」の一言。ここ数年、大同の市街地では道路の拡幅が続きました。従来のもう倍にも道を広げたのです。それでも朝夕のラッシュ時には渋滞が起こります。タクシーの数もすごいですし、個人経営者などで車を持つ人も増えてきた。表通りに面して中層のビルが建ち並ぶ。でも、裏通りにはまだまだレンガ建て、平屋の四合院がみられます。市街地はこんなに大きく変化しましたが、農村の変化はそれほどありません。まずまずと思える村でも、1人あたり年収は千数百元といったところ。4人家族を基準に考えると、一家の年収が5～6千元です。1人あたり年収が5百元を切る村もまだまだあります。最近のレートは1元が14～15円といったところ。要するに、水も土地も限りがあり、収穫は自分の家で食べるのがやっと。食糧価格が多少上がっても、剰余がなければ売ることにはできませんから、収入の増加にはつながらないのです。

人々の生活水準が上がるのは結構なことですが、一方で狭い地域の中でも、都市と農村でここまで格差が拡大するのは大きな問題です。政府も農業税の廃止など様々な手を打っていますが、この格差を解消するのは容易ではありません。私たちも実は困っています。協力事業の規模をこれまで拡大できたのは地元の低賃金構造があったからです。農村が低所得であるのは変わらなくても、出稼ぎの賃金は確実に上昇しています。私たちもその影響を受けます。一昨年に着工した大同県の白登育苗センターは労働力の確保が難しく、単価もまた高くなったのです。ただ彼らは遠方からきての泊まり込みで、「労働時間はどんなに長くてもいいから、1日あたりの賃金を、高くしてくれ」とのことでした。実際に朝は日の出る前から夜は暗くなるまで働いたのです。おかげで作業ははかどりましたけど。1日あたりの賃金も30元以上になりました。南郊区平旺郷の環境林センターでは、女性の臨時工の日当は数年前まで、何と7元だったのです。その後8元から10元ほどになりました。でもこのまま維持することはできないでしょう。頭の痛いことです。

★ 緑の地球ネットワークは税制上の優遇措置をうける認定NPO法人です。この緑化協力事業は会員の力で支えられています。会費は一般・年間12000円、学生3000円。
認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク (GEN)
552-0012 大阪市港区市岡1-4-24 住宅情報ビル5F
TEL.06-6576-6181 FAX.06-6576-6182 E-mail gentree@s4.dion.ne.jp
URL <http://homepage3.nifty.com/gentree/>

★ も世話人(理事)として応援している、認定NPO法人「緑の地球ネットワーク」(GEN)の広報誌から、高見邦雄事務局長の中国滞在記を引用しました。内陸中国に深く入り込み、緑化協力の具体的な事業を通じ、その内情を具に知る高見事務局長(S41年三鷹寮入寮、の前の寮委員長)のレポートほど、中国、とりわけ内陸中国の実情を知る資料はないと思います。政治経熱を超えて政治経涼とも言われる、国交回復以来最悪の日中関係ですが、何時までもこの状態を続けてはいけなし、続かないと思います。いずれ豊かな中国は民主を求め、小泉政権の頑なな姿勢も世界に受け入れられません。中国のアキレス腱である内陸農村の貧困問題、環境問題の解決に草の根で協力する緑の地球ネットワークへの応援を、御願います。親爺同士はいがみ合っても、飯を貰えない隣の子供がいれば、カミサンが隣のカミサンに一升の米をそっと手渡してやる。孔子様から教わった「惻隱の情」を、沿海中国の個人主義・拝金主義者に教えてやるのが、そのお礼というものです！

★ ◎日本の生活は最高・・・マレーシアの留学生(元三鷹国際学生宿舎生)より

光陰矢の如し、10ヶ月間日本へ交換留学生させていただきました。貴重なチャンスでした。色々な新しいことを経験しました。例えば、朝夕のラッシュ電車の人波にもまれ、新幹線にも乗り、スキーをはじめ冬でもスポーツを楽しみ、自分の目で日本を見ることができたのです。自身の目で、現実の日本の社会や文化の凸凹を見ることが出来ました。

初めて家族と離れ一人で外国に暮らすことは孤独感に荷まれました。けれど東大の交換プログラムでは世界中の国々からの留学生がいました。いつもお互い支え合いました。私達は新しい家族のようでした。いい友情を与え合いました。私が最も努力したことは日本語の学習と、自分の目で日本を見るということです。言葉の学習は留学の第一歩で、言葉が通じなければ何もできず、確かに、日本中どこに行っても日本語しか使われないのです。



それで日本語が上手になったと思います。最初、私の日本語は上手ではありませんでしたが、来日3ヶ月後、日本語がうまくなったので、たくさん日本人の友達ができました。彼らは優しいし、色々なことを手伝ってくださいました。

日本に対して抱いているイメージは人によって違うと思います。日本は科学技術の高度に発展した国ですけれども、伝統的な文化を守ることが日本の特徴です。例えば、京都の金閣寺、鎌倉にあるお寺や神社など。私にとって日本では古い物と新しい物が同じように調和を保持しています。つまり、それは国家の財産の一部として大切だと思いました。

留学するのは最初が大変かもしれないけど、いろいろなことが勉強できるし、違う文化に触れ視野が確かに広がったと思いました。私にとって日本の生活は最高でした。

◎A Legacy Is Growing・・・交換留学生のアップルちゃんへ

一昨年秋イオン環境財団主催ジャヤ JUSCO20 周年植樹ツアーに参加、クアラルンプール郊外の国立公園バヤインダウエットランドとボルネオ奥地スコウに、野生動物の餌になる実の付く木を植えました。一年で身の丈以上の森となった写真が届き驚きました。自然条件の厳しい熱帯雨林は、皆伐すると再生困難と聞いていましたが、再生可能なのですね！

皮肉なことに日本で体と環境に優しい植物油や天然ゴムを使うと、熱帯の自然が破壊されます。首都郊外の広大なゴム園も、ボルネオの巨木連なる段々のパーム椰子園も見事でしたが、オランウータンや天狗猿には嬉しくない緑なんですね。ゴムやパーム油で人々の生活が成り立ち、月二万円くらいで暮せるなど色々学んだマレーシアですが、近い内もう一度行きたいと思います。植樹の様子はHP: aeon.info/ef でみることができます。バヤインダウエットランドの公園で、My Growing Legacy を確認してもらえると嬉しいですね！

◎留学生に支援を！

東大ではアジアを中心とした、全国最多の2千2百人の留学生が学んでいます。向学心に燃え、日本に憧れ、花の東京にやってきますが、日本の60年代ほどの所得水準の国から来た一般庶民の子弟が、物価の高い東京で学生生活を続けるのは楽ではありません。マラヤ大学から交換留学生で東大に来て、三鷹寮に入ったアップルちゃんは恵まれた方だと思いますが、学ぶだけで精一杯。5回ほどスキーと一緒に行った時は、カミさんの古いウェアとスキーを引っ張り出し、リフト代などは~~カミ~~が出し、ガソリン代と高速代は同行のジョルダンの佐藤社長や町内会の杉野さん、アルパインの佐藤さんなどにも負担してもらいました。初体験のスキーはとても面白かったようです。帰国の際、お母さんと姉さんも来日しましたが、狭い寮の部屋に泊っているのがわかって、杉野さんのお宅に数日泊めてもらいました。厳しい経済環境で勉学に励む留学生に親日感情を持って帰ってもらうためにも、留学生支援基金へのカンパを今年度も宜しくお願い致します。

◎Jリーガーの父として、そして…三鷹クラブ第65回定例懇談会（大阪）

宮本恒明君とのご縁は、昭和41年春、三鷹寮「登ろう会」で出会ったことに始まります。宮本君は大阪天王寺高校出身、なぜか大阪方面出身メンバーが多かった登ろう会の中で、同じ関西風でもひと味違った大人びた雰囲気我身边に漂わせ、総じてまだまだ高校生気分の抜けない新入メンバーと比べて確かな存在感を持っていたことを思い出します。



当時の登ろう会は、確かに山登りの活動もあるにはありましたが、登山部やワンダーフオーゲル部といった本格的な登山ではなく、丹沢とか奥日光といった程度で、コンパにストーム・寮祭行事といったむしろ本来目的外？の活動に熱心な、ある意味ではまことに三鷹寮らしいサークルではありました。宮本君は高校時代は陸上選手だったとかで、こういう登ろう会の山行にはあきたらなかつたようで、夏休みのほぼ全期間を費やして甲斐駒ヶ岳から光岳までの南アルプス全山縦走単独行とか、北アルプスでも秘境といわれていた黒部溪谷単独行とかの、他のメンバーが目を見張るようなチャレンジングな山行を繰り返していたようです。それでも小生のようないい加減なメンバーも誘ってくれて、冬の北八ヶ岳とか南アルプスの中でもアクセスのかなり長い赤石岳などに行くことができたことを懐かしく思い出します。

それぞれ本郷に進学した後は、折から大きな動きになっていった全共闘の騒然とした世相の中で、下宿を訪問しては酒を酌み交わしながら世の中のこととか人生を語り合うという2年間を過ごし、それぞれが社会に出て行く中、宮本君は出身地の関西電力に入り、しばらくは会う機会もあまりありませんでした。

交流が復活したのは、ここ数年のことで、大阪から東京出張などの機会あるごとに、かつての登ろう会仲間のミニ会合がもたれるようになりました。いまや関西電力の役員に名を連ね、原発問題とか広報とかの要職で活躍中の宮本君ではありますが、聞けば、山登りも日本を飛びだして、本場アルプスのモンブランとか南アメリカのアンデス山脈など機会あるごとに世界あちこちに足を広げているとの由にて、社会人になってからはそういう気力・体力も次第になくなったものにとっては内心忸怩たる思いをさせられています。

加えて、今ではなんといっても大阪ガンバの代表選手、ワールドカップ日本代表キャプテンであり、近い将来日本のサッカー界をしょって立つであろう宮本恒靖選手の御父上という肩書き？までつき、まことにうらやましい限りです。名プレーはもとより宮本選手のあの端正な顔立ちと折り目正しい立ち居振る舞いは、かような宮本君のバックグラウンドとたしか高校時代からのお付き合いだったとかの美人の奥様のご薫陶とバックアップあつてのことと拝察しております。(鳥越賢一郎記)

日時 平成 18 年 3 月 27 日 (月) 18 時 30 分～21 時

場所 大阪弥生会館 (大阪市北区芝田 2 丁目 4 番 53 号 電話 06-6373-1841)

交通 JR 大阪駅中央北口から徒歩 5 分 会費 5000 円 (夕食・飲物付き)

申込先 平賀俊行 干場革治 Fax 03-5689-8192 電話 03-5689-8182

有限会社ティエフネットワーク Email: tfn-hoshiba@blue.one.jp

◎寮生と事務所で新年会

12月の教養学部と三鷹市共催の「三鷹市民と東大三鷹国際学生宿舎生の集い」でエールを交換した、宿舎会の若い寮生諸君と事務所で新年会を開催。三鷹クラブ代表の平賀(S26年入寮)、中村英(S42年入寮)、井上豊(S43年入寮)の年寄り組も入れ15、6人。今回もおでんとピザ、寿司で、年齢の差を超え？盛り上がる。

多感な青春期、人生を決定する疾風怒涛の数年を過ごしたとはいえ、40年ほど前に生活した寮になぜこれほどまでこだわるのか？明治維新政府の下で、官僚養成学校として出発した東大の地盤沈下が言われて久しいが、東大の社会的役割がまだあるなら、地方出身で余り受験競争にさらされず、比較的余力を持って入学した寮生に可能性大ではないか？

方法論的に鍛えられていないけれど、荒削りであるだけ地方出身の寮生に可能性が大ではないか？そんな才能がぶつかりあい、交わり、切磋琢磨していく、自治の、民主主義の学校としての寮を復活させたい。そのための場作りを手伝い、多少のノウハウを伝えたい！そして社会有為の人材になり損ねた者として、社会有為の人材養成に手を貸したいという思いなのですが、さて若者にその意は通じるか？そう言えばホリエモンも東大で、地方出身ですが、寮には入っていませんでしたね！

★三鷹クラブホームページ復活・再生！・・・<http://www.ne.jp/asahi/mitaka/club/>
新年会やその後の追い出しコンパの様子も中村英さんが撮影、掲載してくれています。

◎上田埼玉県知事を迎えて◆ 3.17 D-NET 早春懇親会 ◆

近年には珍しく冬物商品が大いに売れた年でしたが、立春が過ぎ、春一番も吹いて暖かくなってきました。タイミングを失ってしまった新年会に代えて、春の陽気で懇親を深める集まりを案内させていただきます。

2年前、埼玉県の上田知事をお招きしたのをご記憶いただいているでしょうか。その折、朝日新聞の早野さんと約束いただいております。今回、大変お忙しいのに、その約束を果たしていただけることになりました。この機会に、久し振りに酒を酌み交わし、会員各位と懇親させていただきます。

日 時 3月17日(金)

18:00—受付開始 18:30 開演挨拶:干場革治(世話人代表)

18:35 時局経済について 荒岡拓弥(機会振興協会研究主幹)

19:00 地方自治について 上田清司(埼玉県知事)

19:50 懇親会 21:00 終了

場 所 弘済会館4階(JR、地下鉄四谷駅 千代田区麴町 5-1 tel03-5276-0333)

参加費 会員 7000円 非会員 8000円 * 参加の連絡は3月13日(月)迄に、

事務局宛 FAX 03-5228-1715 又は メール:w-1942@ph.highway.ne.jp

〒162-0842 新宿区市谷砂土原町 3-4-1 616 団塊政策研究ネットワーク

◎ 事務所も国際化?!

二人で交互に事務所につめてもらっているアシスタントが一人、フルタイムで働きたいというので2月で止める。これまで伝を頼って探してきたので、今回も探すがなかなかみつからない。通信での公募も考えたのだが、日本に帰化した中国からの留学生汪君の奥さんを思い出す。北京美人で八王子に住んでいる。も一度一緒に食事したことがある。日本の大学を卒業し、日本企業の中国法人で働いていたので、日本語は堪能だし、若いからパソコンも大丈夫だ。家で旦那の帰りを毎日じっと待っているより気晴らしになり、日本の生活にも早く慣れる。何より、知っている人間の方が事務所を任せやすい。そういうことで、謝楠(シャナン)さんに週2~3回事務所で仕事をしてもらっています。当事務所も国際化したものですが、中国語クラス出身を名乗る音痴のは、相変わらず中国語は分からず仕舞いです。再見!